

『マツヤ・プラーナ』所収の 「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について

宮 本 久 義

1. はじめに

ヒンドゥー教のプラーナ聖典群の多くには、聖地信仰に関連する「マーハートミヤ」（威光書）と総称される章が含まれる。それらの「マーハートミヤ」にはそれぞれの聖地の特色や縁起と巡礼作法が主として記述されており、ヒンドゥー教信仰の展開を解明するための重要な資料を提供している。プラーナ聖典はさらに、インド古代・中世の文化全般を伝える貴重な宝庫であるが、日本ではその研究や翻訳があまり進んでいないのが現状である。本稿では、それらのうちヒンドゥー教最大の聖地といわれるヴァーラーナスィー（別名カーシー、バナーラス、ベナレス）¹⁾について記述した『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」を中心に、主要部分の和訳を試み、それに基づいて聖地信仰がどのように醸成され定着して行くかを考察する。『マツヤ・プラーナ』の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」の年代は研究者によってかなり異なるものが与えられている。R. C. Hazra(pp.45-46)はそのシャイヴァ的性格からして700A.D.より後、また『クールマ・プラーナ』I, 30-34に類似の記述があるが『マツヤ・プラーナ』のものに比べると新しく13世紀半ばを下ることはない。それゆえ1200年より以後ということはない。さらに他文献への引用を考慮して1075A.D.より前とする。しかしL. Rocher(p.199)は Hazraを含めた何人かの研究者の説を挙げるが、結論を出すに至ってはいない。最近発見された写本に基づくH. T. Bakker and H. Isaacson 編の『スカンダ・プラーナ』にも『マツヤ・プラーナ』の当該箇所とパラレルの記述が含まれ、年代に関しても編者が言及している。それによると、『スカンダ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」は8世紀頃に成立したと考えられており、またその他

(2)

のプラーナ聖典中のいくつかある「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」に先行するものとも考えられている。そうすると本稿で扱う『マツヤ・プラーナ』の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」は8世紀以降の成立と考えられる。

『マツヤ・プラーナ』の中で「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」は第180～185章があげられている。それぞれの詩節数は第180章が100詩節、以下第181章32詩節、第182章27詩節、第183章106詩節、第184章63詩節、第185章69詩節を数える。紙幅の関係で、本稿では第180～182章を訳出し、原文のローマナイズは重要と思われる箇所のみ註に記した。後半の訳と考察は別稿に譲りたい。

2. 『マツヤ・プラーナ』第180-185章主要部分和訳

第180章

[この章は全100詩節からなり、聖仙たちが語り部であるスータに聖地ヴァーラーナスィーの威光(魅力)を説くよう懇願し、それに対してスータが、ヤクシャ(夜叉)であるプールナバッドラの息子ハリケーシャ(別名ピンガラ)が何故この聖地を護る番人になったのかを答える形式になっている。その大枠のエピソードの間に、ヴァーラーナスィーの聖地としての魅力が語られる。]

聖仙たちが言った。

1.

アンダカの殺戮については、あなたがそのように語ったままにお聞きしました、スータよ。そこで今、ヴァーラーナスィーのマーハートミヤ(威光)についてお聞きしたいと願っております。

2.

大いに輝ける者である聖ピンガラはどうして眷族(ガナ)となり、ヴァーラーナスィーにおいて食物の施与者になったのですか。

3.

どのようにして聖域の守護者になったのですか。愛される者にどのようにしてなったのですか。ブラフマー神の息子よ。あなたによ

てそれが語られるのをお聞きしたく願っております。

スータが言った。

4. かのピンガラがどのようにしてガネーシャ性を獲得したのか、人々の食物施与者になったか、このヴァーラーナスイーが居所になったか、お聞きなさい。
5. プールナバッドラの息子で、幸運と威力を持ったヤクシャ（夜叉）がおります。〔彼は〕ハリケーシャとして名が知られ、篤信で、法を遵守する者でありました。
6. まさに生まれた時から、彼はシヴァ神に無上の帰依をし、彼（シヴァ）に敬礼し、彼を尊崇し、彼に専心しておりました。
7. 座っている時も、横になっている時も、歩いている時も、立ち止まっている時も、つき従っている時も、食べている時も、また飲んでいゝる時も、ルッドラ（シヴァ神）のこののみを考えておりました。
8. 彼（シヴァ）にこのように専心している者（息子）に、父のプールナバッドラは言いました。「私はお前を息子とは思わない。おまえは不幸に生まれた者である。
9. 何故なら、ヤクシャの家系に属する者たちには、このような振る舞いはない。お前たちはグヒヤカ²⁾であり、本性上残忍な心を持つ者なのだ。
10. まさに肉を喰らう者であり、悪しきものを喰らう者であり、殺生を性とする者たちである、息子よ。そのようにするな。お前の生き方はブラフマーによってそのように決められたものではない。
11. 自生者（ブラフマー）によって定められたことが捨てられるべきで

(4)

ないなら、家住者たちは他の住期（アーシュラマ）から生じるカルマ（行為）をなすべきではない。

12.

様々なカルマとともに人間の感情を捨てて、振る舞え。[もし]お前がそのように道はずれた者ならば、まさに人間から生まれた者である [と私は考える]。

13.

お前にとって、その（人間の）出自に依拠した様々の行為があるように、私によっても、見よ、カルマが定められている。これは疑うことができない。]

スータが言った。

14.

かの息子にこのように言ったかの威力あるプールナバッドラは、「息子よ、お前の望むようにすぐに出て行け。」と厳しく言った。

15.

そこで彼（ハリケーシャ）は家と親族を捨てて出て、ヴァーラーナシーに居を定め、堅固な苦行を修した。

16.

まばたきもせず、乾いた木や石のように不動となり、諸感官を制御して、じっと動かなかった。

17.

さて、まさにかの偉人が苦行に専心した結果、神々の1千年が過ぎた。

18-19.

蟻塚に覆われ、蟻に喰われ、さらにまた鋭い金剛針の口を持つもの（蜂）によって刺されつつ、肉や血や皮を失い、ジャスミンの花のように匂う、月のように [白い] ほら貝のように輝く骨のみとなった者は、シヴァ神のみを念じ続けていた。

20ab.

しばらくするうちに、女神（シヴァ神妃）がシヴァ神にお願いした。

女神が言った。

21.

「今まさに再び苑をいつものように見たく思います。神よ、私にとって興味深い聖地のマーハートミヤをお聞きしたく思います。なぜなら、ここはあなたにとって愛しいところであり、また至上の果報をもたらすところだから。」

22.

このように妻に懇願された最高神は、全ての質問にありのままに答えた。

23.

神々の神シャンカラ（シヴァ神の別名）はパールヴァティーを連れ出した。ピナーカ（シヴァ神の弓の名）を持つ神は妻をとまって苑を見せた。

24-44. (略)：苑の自然の情景の賛美

45.

「神よ、至上の壮麗さをそなえた苑を見せていただきましたので、今度は聖地の全ての美徳をここにお話し下さいませ。」

46.

なぜなら、この聖地アヴィムクタ³⁾の威光（マーハートミヤ）をそのように聞いてさえも、私は満足できません。それ故さらに私にお話し下さいませ。」

神々の中の神が言った。

47.

「ヴァーラーナシーは、私にとって常にもっとも秘密の地で、まさに全ての生類にとって、常に解脱の原因となっている⁴⁾。」

48-49ab.

ここには、女神よ、常に私を崇拝するスィツダ（成就者）たちがおり、様々の徴を身に帯びた者たちが、いつも私の天界を懇願している。
〔彼らは〕最高のヨーガを修し、感官を制御し、心を解放させている。

49cd-51ab.

様々の木々が生い茂り、様々の鳥がさえずり、紅蓮や青蓮の花に満ちた池に飾られ、アプサラス（天女）とガンダルヴァ（天人）たちが常に住まう吉祥なるところに、私が好んで住むその理由を聞きなさい。

51cd-52ab.

私を念じ、私に自分の全ての行ないを捧げている私の信者は、ほかのどんな所でも得られない解脱を、まさにここで得る。⁵⁾

52cd-53.

ここは私の最も神聖で、[単なる] 秘密よりもさらに偉大なる秘密である。ブラフマーなどの神々や解脱を願う成就者たちも知っている。それ故、最も愛しい土地（聖地）であり、そしてそれ故にここには私の悦びがある。⁶⁾

54.

私は [ここから] 離れないし、これからも離れないであろう。それ故、この偉大な土地はアヴィムクタと記憶される（=言われる）べきである。⁷⁾

55-56ab.

ナイミシヤやクルクシェートラ、あるいはガンガードヴァーラ、プシュカラ⁸⁾で沐浴したり住んだりしても解脱が得られない者が、ここで [それを] 得る。それゆえ、ここは格別なのである。

56cd-57ab.

プラヤーガ⁹⁾でも解脱できるが、ここでも私の恩恵（パリグラハ）によって [解脱できる]。聖地の頂点であるプラヤーガよりこここそが偉大であると記憶される（=言われる）べきである。

57cd-58ab.

偉大な苦行者ジャイギーシャヴィヤ¹⁰⁾はヨーガによって最高の成就を得た。[それは] この土地の威光のおかげと、私に対する信愛の感情によってである。

58cd-59.

偉大なるジャイギーシャヴィヤはヨーガ行者の[最高の]境地を願った。[彼は] その場所で常に私を瞑想し、激しくヨーガの火が灯った。

神々でも得るのが難しい最高の独存状態に達した。

60.

非顕現の徴を持ち、あらゆる教義を知る聖者によっても、ここで神々やダーナヴァ（悪魔あるいは半神）たちにとっても得るのが難しい解脱が得られる。

61.

彼らに私は至上の享楽と神通力と私自身との合一と望みの境地を授ける。

62.

偉大なヤクシャであり、すべての行いを[私に]捧げたクペーラ神は、聖地に住むことだけで眷族の長となった。

63.

サンヴァルタ¹¹⁾も私の信徒になることによって、そうなるであろう。まさにここで私を崇拜すると、女神よ、最上の成就が得られる。

64.

パラシャラの息子でヨーガ行者であり、偉大な苦行者である聖仙ヴィヤーサ¹²⁾は、将来ダルマの実践者、ヴェーダの組織の宣揚者（顕現させる者）になるが、偉大な聖者である彼もまた、蓮の眼を持つ者（シヴァ神妃）よ、この土地に住むであろう。

65cd-66.

神仙（デーヴァルシ）たちとともに、ブラフマー、ヴィシュヌ、ヴァーユ、デイヴァーカーラ（太陽神）、および神々の長シャックラ（インドラ）、そしてデイヴァウカス（天住者）たち、マハートマン（偉大な魂を持つ者）たちもすべて、私をこそ崇拜する、良き斎戒者よ。

67.

その他の、姿を変えた偉大な斎戒者にしてヨーガ行者であるスイツダ（成就者）たちも、心を専一にして、私をここで常に崇拜している。

68-69.

アラルカ王¹³⁾も私の恩恵によってこの都を獲得するであろう。そして彼はこれ（都）を、以前のように4つの種姓に基づく社会体制にして、繁栄させ、人口を増加させ、また信愛によって末長く、私の上に全霊を置き、まさに私を得るであろう。

70-71ab.

彼らをはじめとして、美しい肢体の持ち主（シヴァ神妃）よ、[この]土地に住む、家住者や出家で、私に信愛を置き、私を崇拜する者たちも、私の恩恵（プラサーダ）によって、非常に得難い解脱を得られるであろう。

71cd-72ab.

現世の享楽に心を奪われ、正しき行いを捨てたうつけ者でさえ、この土地で死ねば、再び輪廻に入ることはない。

72cd-73.

さらに、すべての利己的でなく、賢く（堅固で）、心を純質に保ち、感官を制御し、また齋戒し、隠棲し、私に専一し、知性を持ち、貪欲を離れた者たちは、身体が消滅すると、私の恩恵によって最高の解脱に到達する、良き齋戒者よ。

74.

何千年もの転生のあいだヨーガを修行して得られるもの、その最高の解脱をまさにここでは死ねば得られる。

75.

これが、女神よ、この土地の [もたらす] 偉大な果報であり、私によって汝にアヴィムクタの至上の秘密が簡潔に説かれた。

76.

それ故、シヴァ神妃よ、それより上の成就や秘密はない。
ヨーガを知る者や、この世におけるヨーガの神たちは、それを知っている。

77.

これこそが最高の場所であり、これこそが最高の吉祥である。これこそが最高のブラフマンであり、これこそが最高の境地である。

78.

ヴァーラーナシーは三界の精髓で、常に我が憩いの都である、ヒマラーヤの娘よ。様々の悪事を働いた者でも、この地に来た者は悪が消滅して汚れなき人となる。

79.

これが、女神よ、素晴らしい木々や茂みや蔓草の中の花であり、私

の常に最も愛しい土地である。ここで死んだ人間は、また愚かなアー
 ガマ（聖典、伝承）を持たない者たちも、[最高の] 境地を得るこ
 とは疑いない。」

スータが言った。

80.

その後、シヴァ神は、山の神より生まれた女神に、信徒であるヤク
 シャに恩恵の約束を与えたことを語った。「輝く女性よ、

81.

私の信徒は、臀部豊かな女性よ（夫に腰掛ける女性よ）、苦行によ
 り罪障が減し、私からこの約束を受けるにふさわしい、世界の主宰
 神の妻よ。」

82.

このように言って、世界の主である神は女神とともに、やせ衰えや
 つれたヤクシャのいるところへ行った。

83-84ab.

そして、女神がかのグヒヤカに視線を落とし、臍に繋がれた骨が骸
 骨 [さながらに] 白く輝いているのを見て、その時、女神は [シヴァ]
 神にグヒヤカを示して言った。

84cd-85ab.

「実にあなたは神々によって恐ろしい人と言われております、シャ
 ンカラ（吉祥なる者）よ。[なぜなら、] 彼（ヤクシャ）のこのよう
 な苦行に対してヴァラ（約束、恩恵）を与えないのですから。

85cd-86.

偉大なる神よ、この神聖で崇められている土地で、どうしてヤクシャ
 の息子はこのように苦難に耐えているのですか。最高の神よ、恩恵
 （恩情）から直ちに彼にヴァラをお与え下さい。

87-88ab.

神よ、マヌをはじめとする最高の聖仙たちは、[シヴァ神が] 怒っ
 ていてもあるいは満足していても、両方から願望成就是得られる、
 と言っております。世俗的な喜びでも、王国でも、最期の解脱でも、
 常なる吉祥を与える者（シヴァ神）からであると。」

(10)

88cd-89ab.

このように言われた世界の主である神は、女神とともにやせ衰えやつれたヤクシャのいるところへ行った。

89cd-90ab.

牡牛を旗印とする者（シヴァ神）は、信愛の情から敬礼しているかのハリケーシャを見て、彼に、それによって彼がシャンカラを見た神聖な眼を与えた。

90cd-91ab.

さて、ヤクシャはその時、彼（シヴァ神）の命令で、ゆっくりと両眼を開くと、牡牛を旗印とする神が眷族とともに居るのを見た。

神々の中の神が言った。

91cd-92ab.

「汝にヴァラを授けよう。まず三界を見られること、さらに身体が[私、シヴァ神と] 同じになることを。懊悩を離れた者は私を見よ。」

スータが言った。

92cd-93ab.

そこで彼（ヤクシャ）はヴァラを得て、不壊になった身体で両足に敬礼し、頭の上で合掌して動かなかった。

93cd-94ab.

さて、彼（シヴァ）によって「私は与えた」と告げられたとき、[ヤクシャは] 言った。「神よ、私に他でもない堅固な [あなたに対する] 信愛（バクティ）をお授け下さい。」

94cd-95.

人々に食物を施与する者であり、不壊の指導者であり、また、あなたの聖地アヴィムクタを常に見ていられるように、神々の主宰神よ、あなたからそれら最上のヴァラを戴きたいと願います。」

神々の中の神が言った。

96.

「老死を捨て、あらゆる病から離れ、群れの長、財の施与者、すべ

ての者に崇められる者に成るであろう。

97.

あらゆるものに負けず、ヨーガの超能力を具え、人々に食物を施与する者であり、聖地の警護者（クシェットラパーラ）に成るであろう。

98.

さらに、偉大な力を持ち、偉大な正義感であり、敬虔で、私の愛する者であり、三眼を具え、警杖を持つ者（ダндаパーニ）で、偉大なヨーガ行者に「成るであろう」。

99.

ウドブラマ（攪乱）とサンブラマ（混乱）とが汝の手下の眷族となり、汝の命令で人々を攪乱したり混乱させたりするであろう。」

スータが言った。

100.

このようにかの神はそこでヤクシャを群れの長（ガネーシュヴァラ）にし、親愛なる不死の神は彼を伴って行った。

第181章

[スータが聖仙たちに、ナンディケーシュヴァラがサナットクマーラに語ったことを説く。それはかつてシヴァ神がメール山でパールヴァティーに聞かせた話である。]

スータが語った。

1.

この善を生じ悪を滅する素晴らしい話を、清浄で苦行を積んだすべての聖仙たちは、聞かれない。

2.

神々しくルッドラ（シヴァ神）に等しい勇猛なナンディケーシュヴァラに、尊者サナットクマーラは尋ねた。

3.

あらゆる生類にとっての偉大なる魂、最高の魂であるバヴァ（シヴァ神）が、常に堅固に居るところ（聖地）の秘密をありのままに語っ

(12)

てください。

4.

神々やダーナヴァたちにはとるのが難しい恐ろしい姿をとって、世界還滅時まで不動なままでのシヴァ神が。

ナンディケーシュヴァラが語った。

5.

かつて（シヴァ）神によって最も善なるプラーナ（古譚）が語られたが、そのすべてをシヴァ神に敬礼してから語ろう。

6.

そのあと、満足したシヴァ神によって、ウマー（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）を喜ばすために語られた話が、常にご自身が居る世界に知れ渡ったのだ。

7.

シヴァの半身に座し、栄光を持つ女神（シヴァ神妃）は、メール山の山頂でシヴァに敬礼してから尋ねた。

女神が語った。

8.

「尊者よ、神々の中の神よ、三日月を額にいただく者よ、この世における死すべき人々および修行者たちのダルマ（義務）についてお話下さい。

9.

「そこにおいて」なされた朗詠、行われた供養、修された苦行、瞑想、読誦は、どうして不滅になるのですか。

10.

何千年もの転生のあいだに蓄積された罪がどうして消滅するのか、私にお話下さい、シヴァ神（シャンカラ）よ。

11.

そこにおいて、信愛によってなされ、シヴァ神よ、あなたが満足する誓戒、規則、振る舞い、そして法とは [どのようなものですか]。

12.

そこにおいてあらゆるものを成就させ、不滅の解脱をもたらすもの、私が最も知りたいと思っているその全てをお話下さい。」

シヴァ神が語った。

13.

「女神よ、秘密の中の最高の秘密を聞きなさい。あらゆる聖地の中で最も有名で、私にとって愛しいアヴィムクタのことを。

14.

68の聖地が以前述べられたが、その中で [アヴィムクタが] 最高の聖地である。そこにはルツドラ (シヴァ) 自身がクリッティヴァーサス (獣皮をまとう者=シヴァ) そのものとして居るのを目の当たりにできる。

15.

[私が] 常にずっと居るアヴィムクタ、その土地は私によって捨てられない。それ故アヴィムクタと言われるのである。

16-17ab.

アヴィムクタには最高の成就があり、アヴィムクタには最高の解脱がある。

[そこにおいて] なされた朗詠、行われた供養、修された苦行、瞑想、読誦、布施のすべては不滅になる。

17cd-18.

何千年もの転生のあいだに蓄積された罪は、アヴィムクタに入った者にとって、アヴィムクタの火によって、火に入れられた綿のように焼かれて、そのすべてが消滅する。

19-21.

バラモン、クシャットリヤ、ヴァイシヤ、シュードラ、種姓の混じった者たち、虫、種姓外者、また異種姓者どうしの結婚で罪深い母胎から生まれた者、昆虫、蟻、また獣、鳥が、時至ってアヴィムクタで死を迎えれば、愛しき者よ、聞きなさい。頭上に半月を置き、額に目を持つ牡牛の旗印を持つ者 (シヴァ) になる。私の吉祥なる都において、人間たちは喜ぶ。

(14)

22.

望まなくとも、あるいは望んでも、あるいはまた下等動物でも、アヴィムクタで命を捨てるなら、私の世界に入る。

23.

アヴィムクタへ行ったら、いかなるときでも時間の尽きるまで、石で両足を砕いて、まさにそこで死ぬがよい。

24.

アヴィムクタに行ったなら、女神よ、そこから去ってはならない。そのような人は私の境地を得る。このことについて考える必要はない。

25-26.

ヴァストトラパダ、ルッドラコーティ、聖地スイッデーシュヴァラ、ゴールナ、ルッドラカルナ、そしてスヴァルナークシャ、アマラ、マハーカーラ、カーヤーヴァローハナ、これらの淨き場所に、[私は]二度のサンディヤー時（日昇、日没時）に現れるであろう。

27.

さらにまたカーリンジャラヴァナ、シャンクカルナ、スタレーシュヴァラ、これらの淨き場所に、現れるであろう、我が愛しき者よ。[しかし、]アヴィムクタでは、美しき腰の女よ、三度のサンディヤー時（日昇、南中、日没時）に[現れる]、これは疑いない。

28-30.

最高の秘密たるハリシュチャンドラ、秘密のアームラータケーシュヴァラ、最高の秘密たるジャーレーシュヴァラ、そして秘密のシュリーパルヴァタ、また秘密のマハーラヤ、素晴らしいクリミチャンデーシュヴァラ、秘密の中の秘密であるケーダーラ、そしてマハーバイラヴァ。アヴィムクタにおける八つのこれらの場所に、我が愛しき者よ、三度のサンディヤー時に現れるであろう、豊かな腰の女よ、[これは]疑いない。

31.

戒を良く守る者よ、三界におけるこれらの聖地は常にアヴィムクタの足もとにあるのだ。

32.

アヴィムクタの神聖な話の続きと、素晴らしき女よ、将来の偉大な魂である聖仙たちのマーハートミヤは、スカンダが語るであろう。]

第182章

[スカンダが聖仙たちにカイラーサ山で語る。]

スータが語った。

1-2.

カイラーサ山の頂上に座し、ブラフマンを知る者たちの中の最上の者であるスカンダに、サナカをはじめとする苦行を修するあらゆる聖仙たちと、シヴァ神に帰依するあらゆる王仙たちが尋ねた。
スカンダよ、この地上において、常にシヴァ神が住むところについて語って下さい。

スカンダが語った。

3-4.

偉大な魂であり、あらゆる生類の魂であり、永遠なる神々の神は、神々やダーナヴァにとってるのが難しい恐ろしい姿をとり、生類が滅亡するまで主は不動の姿で留まる。アヴィムクタは秘密の中の最高の秘密であると知れ。

5-6

アヴィムクタには常に成就があり、常に [シヴァ神が] 居る。その聖地のマーハートミヤはシヴァ神によって、最高の清浄な場所であり、聖地であり、斎場であり、火葬場を具え、宮廷であり、神聖で隠されたところであると語られた。

7.

[そこは] 地上と結び付き、空中にはシヴァの世界（シヴァーラヤ）がある。専心していない者たちには見えないが、専心している者たちは心で見える。

8-9.

禁欲の戒を守り、ヴェーダの奥義（ヴェーダーンタ）を知る成就者

(16)

たちは、肉体の減びるまで、その土地を離れず、禁欲の戒によって、最高の望みのものが生ずる（一部意味不明）。祭祀を遵守する者たちにとっては、常に罪なきことを本質とする解脱があるとされる。

10.

心を専一にするバラモンがそこに住めば、三度の食事を享受し、風を喰らう者（行者）と同様になるであろう。

11.

ほんのしばらくでもアヴィムクタにいる帰依者は、禁欲者と同様になり、最高の苦行〔の果報〕を得られるであろう。

12.

平静で、食事を少なく摂り、感官を制御した者が1か月の間そこに住めば、彼によって、神聖で偉大なパーシュパタ¹⁴⁾の誓戒が完全になされたことになる。

13.

生死の恐れを超越して、最高の解脱に到達する者は、至福の善き解脱とヨーガの終極（解脱）に赴くであろう。

14.

数百回の転生によっても〔得られない〕神聖なヨーガの終極も、聖地の威光（マーハートミヤ）と、シヴァ神の威力（プラバーヴァ）によって〔得られるであろう〕。

15.

バラモンを殺した者でも、いつかアヴィムクタに入ったならば、彼にはその聖地の威光によって、バラモン殺し〔の罪〕が消滅する。

16.

肉体の減びるまで聖地を離れない者は、バラモン殺しのみならず、以前になしたもの（罪）も消滅する。

17.

心を専一にしてアヴィムクタを離れない者は、ヴィシユヴェーシュヴァ¹⁵⁾の神を得て、再び生まれることがない。

18.

常に満足している神は彼にあらゆる望みのものを与える。サーンキヤ・ヨーガの門であるかの神はそこに住む。

19-20ab.

シヴァ神は眷族とともに、帰依者たちへの慈悲のゆえに[ここにいる]。アヴィムクタは最高の聖地であり、アヴィムクタには最高の解脱がある。アヴィムクタには最高の成就があり、アヴィムクタには最高の境地がある。

20cd.-21ab.

天孫の聖仙（デーヴァルシ）たちが住むアヴィムクタに居住すべきである。思慮ある人間はもし望めば、再び生まれ変わることはない。

21cd.-22ab.

メール山のまわりにある島々やすべての海の美点は語るができるが、アヴィムクタについては [そのすべての美点を語る] できない。

22cd.-24cd.

人々が死ぬときに諸々の急所が切られると、風に促された者たちの、記憶は [再び] 生じない。[しかし] アヴィムクタで最期を迎える帰依者たちには、自在神自らがカルマに促された者たちの、耳に囁きを与える。マニカルニー (=マニカルニカー) で身体を捨てる者は望みの境地に赴く。

25-26.

自在神に促された者は、悪人には到達しがたい所に行く。これ（この世）は無常であり、人間は罪深いものであると知って、輪廻の恐怖から解放し、生計（ヨーガ・クシェーマ）を与え、神聖で、多くの障害を破壊するアヴィムクタに住むべきである。

27.

諸々の障害にかき乱された者も、アヴィムクタを離れないならば、老いや死、そして誕生を、これらは永遠でないとして、離れる。アヴィムクタにおける恩寵により、シヴァ神との合一が得られるであろう。

〈註〉

- 1) 聖地ヴァーラーナシーの宗教的背景全般については小西・宮本編『インド・道の文化誌』pp.106-122、宮本『ヒンドゥー聖地 思索の旅』p.149 ff参照。
- 2) guhyaka. 原義は「隠れた者」といった意味であるが、yakṣa（夜叉）とほぼ同義に扱われる。
- 3) avimukta. ヴァーラーナシーの別名。
- 4) idaṃ guhyatamaṃ kṣetraṃ sadā vārāṇasī mama,
sarveṣāṃ eva bhūtānāṃ hetur mokṣasya sarvadā.
- 5) manmanā mama bhaktāś ca mayi sarvārpitakriyāḥ,
yathā mokṣam ihāpnoti hy anyatra na tathā kvacit.
- 6) etan mama paraṃ divyaṃ guhyād guhyataraṃ mahat,
brahmādayas tu jānanti ye 'pi siddhā mumukṣavaḥ,
ataḥ priyatamaṃ kṣetraṃ tasmāc ceḥa ratir mama.
- 7) vimuktaṃ na mayā yasmān mokṣyate vā kadācana,
mahat kṣetraṃ idaṃ tasmād avimuktaṃ idaṃ smṛtam.
- 8) いずれも聖地名。
- 9) Prayāga. ウツタルプラデーシュ州にある聖地。現在のアッラーハーバード。
- 10) Jaiṅgīśavya. ジャイギーシャヴィヤは『ヨーガストラ』の註釈書『ヨーガストラ・パーシヤ』3.18にも出てくるヨーガ行者で、プラーナ聖典では、ヴァーラーナシーにおいてシヴァ神の恩恵を受けてその修行を完成させたことで有名。デイヴォーダーサ王が支配しているときに、シヴァはマンダラ山に行ってしまった。ジャイギーシャヴィヤは、シヴァが帰還するまで飲食しないという誓いを立てた。彼は四肢が萎縮するまで瞑想にふけた。シヴァは北から都に帰還すると、すぐに彼のところに向かい、恩恵を与えた。「ニルヴァーナの手段であるヨーガシャーストラという知恵を授ける。彼がすべてのヨーガ行者の師になるように。汝はすべてのヨーガの知識を知るであろう。恩恵により、またその知識により、汝は解脱を得るであろう。」(『カーシー・カンダ』40.162; 『カーシー・ラハスヤ』34-5)
現在、ヴァーラーナシーの北西部にジャイギーシャヴィエーシュヴァラを祀る寺院がある。オーンカーラ巡礼路にあり、ヨーガの達成を祈願する者たちが訪れる。(Eck. p.357)
- 11) Saṃvarta. 梵仙（ブラフマー神の子孫）アングラスの8人の息子のうちの一人。三男。

- 12) Vyāsa. 『マハーバーラタ』の編者と伝えられる聖仙で、その他にヴェーダの編者ともブラーナの編者とも言われる。(菅沼p.87) 『マツヤ・ブラーナ』 185.13-42.には、ヴィヤーサがこの地に来て乞食をしたが得られず、怒ってこの都に住む人々を呪詛したエピソードが説かれている。
- 13) Alarka. ヴァーラーナシーの王。正直者でヨーガを修する。かつて、五感を制御するため、心で眼、耳、舌、身、意に矢を放った。しかし五感は従わなかった。そこで、彼が瞑想をすると、従ったと言うエピソードが『マハーバーラタ』(アヌシャーサナ・パルヴァン)にある。また『ラーマーヤナ』(アヨーディヤー・カーンダ)には、かつて、バラモンの少年に願い事をかなえる約束をした時、少年が眼を所望したので、彼がそれを与えたと言うエピソードが知られる。(Mani. pp.26-27)
- 14) Pāśupata. シヴァ派の一派で獣主派と訳される。開祖はラクリーシャで『パーシュパタ・ストトラ』を著したとされる。シヴァ神と個我の合一のため、わざと人々の嫌悪する行為をし、誤解から生ずる功德を自分に蓄積するという特異な修行法で知られる。
- 15) Viśveśvara. 現在ヴァーラーナシーの旧市街にあるヴィシュヴァナート(世界の主)寺院の前身の寺院のご神体。この寺院の前身は5世紀には建立されていたようで、12世紀にはヴィシュヴェーシュヴァラ(世界の主宰神)寺院として繁栄していた。しかし12世紀末から17世紀にかけて、イスラーム教徒による少なくとも6回の破壊を被り、何度か移転を余儀なくされた。現在あるものは1777年にインド中西部インダウルの女王アハリヤー・バーイーの寄進によって再建されたヴィシュヴァナート寺院である。尖塔の金箔は、1839年に北西インドのシク王国ランジート・シンに寄進された約790キログラムの純金で葺かれているので、通称黄金寺院(ゴールデン・テンブル)と呼ばれている。

《テクスト》

Matsyapurāṇa. Ananda Ashrama Sanskrit Series 54. Poona, 1981. (底本)

Kāśikhaṇḍa. Karuṇāpati Tripañī(ed.), (1-3 parts) Varanasi: Sampurnananda Sanskrit University, 1991-96.

Kāśīmokṣanirṇaya. Ambika Datta Upadhyaya (ed.), Gorakhpur, 1931.

Kāśīrahasya. With a commentary by Nīlakaṇṭha Sarasvatī. Gurumaṇḍala Granthamālā No.XIV, Vol.III, Calcutta: Gurumaṇḍala Prakāśana, 1957.

Skandamahāpurāṇa. Delhi: Nag Publishers, 1986.

- The Matsyapurāṇam*. H.H. Wilson (foreword), 2 vols., Delhi: Nag Publishers, 1983.
The Skandapurāṇa, Vol. II A, Adhyāyas 26-31.14, The Vārāṇasī Cycle. H.T. Bakker and
H. Isaacson (eds.), Groningen: Egbert Forsten, 2004.

《参考文献》

- Eck, Diana L. : *Banaras: City of Light*. London: Routledge & Kegan Paul, 1983.
Hazra, R.C. *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*. Delhi-Patna-
Varanasi: Motilal Banarsidass, 2nd ed., 1975.
Hertel, B.R. and C.A. Humes (eds.) : *Living Banaras*. Albany, N.Y. : State University
of New York, 1993.
Mani, Vettam, *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1975.
Parry, Jonathan P. : *Death in Banaras*. Cambridge: Cambridge University Press. 1994.
Rocher, Ludo, *The Purāṇas*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1986.
Singh, Rana P.B. : *Towards the Pilgrimage Archetype : The Pañcakroṣī Yātrā of
Banāras*. Varanasi: Indica Books, 2002.
Sukul, Kubernāth : *Vārāṇasī Vaibhava*. Patnā: Bihār Rāṣṭrabhāṣā Pariṣad, 1977.
小西正捷・宮本久義編『インド・道の文化誌』春秋社、1995。
菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版、1985。
宮本久義『ヒンドゥー聖地 思索の旅』山川出版社、2003。

《キーワード》

マツヤ・ブラーナ、ヴァーラーナスイー、マーハートミヤ、ヒンドゥー教、聖地信仰